

昔むかし、あるところに、まことに、美しい女がいて、息子が七人ありました。住むところがなかつたので、息子たちをつれて国じゅうを歩きまわり、人びとのおめぐみにすがつてくらしていました。

ある村まで来たとき、女は、人の住んでいない宮殿きゅうでんがあると聞きました。それは、このあたりでいちばん美しく、りっぱなたてものなのですが、こわいものが出るので人が住まなくなつたということでした。

女は、村長のところに行つて、その宮殿に泊とまらせてもらえなかつたのみました。村長は、ひどく身ぶるいして、いました。

「とんでもない。あの宮殿きゅうでんには、夜になると、くさりのガチャガチャいう音や、ほねのガタガタ鳴ぱる音がして、化けものが出るんだぞ」

けれども、女は、つかれたからだをどこに横たえればいいか分からなかつたので、「わたしは、まずしくて、うしなう物は何もないから、何が起ころうともかまいやしません」と答えました。

こうして、女と息子たちは、宮殿に入つていきました。台所のかまどに火をつけてしまらくすると、くさりのガチャガチャいう音や、ほねがガタガタ鳴つたりきしんだりする音が聞こえはじめました。音はどんどん大きくなつて、しまいに宮殿全体がゆれはじめました。それから、声が聞こえてきました。

「明かりをつけてくれ。明かりをつけてくれ」

女は、立つていって、かまどの火の中から先のもえているつえを一本取りだし、いちばん上の息子にわたしていいました。

「明かりをほしいといつてるから、こわがらないで、これを持つていつておやり」

すると、ほかの六人の息子たちも、兄さんひとりに行かせないで、兄さんの後からぞろぞろついていきました。

みんなが、声の聞こえてきたほうへ歩いていくと、大広間にやつて来ました。

大広間のまんなかに、大きなひじかけいすがおいてあり、ひとりの老人ろうじんがすわつていました。老人の長い濃いひげは、床ゆかにとどきそうでした。老人は、手に、文字がたてに

書いてあるぶあつい本を持っていました。

まわりのかべには、ねこやへびや、見たこともない動物など、たくさん絵がかけてあり、いやらしいしかめつづらをした悪魔の絵もありました。けれども、息子たちは「わがらないで、大広間をつつ切つて、いすのところまで行きました。

いちばん上の息子は、つえの明かりをかかげて老人のそばに立ちました。老人は、むさぼるように本を読みはじめました。

しばらくすると、老人は、本をぜんぶ読みおえ、ため息をつきながら本をとじました。そして、いいました。

「わしは、生きているとき、この宮殿の主だった。金持ちいじょうに金持ちだったが、この聖なる本を読む義務をおこたつたために、死んでから読まねばならなかつた。だが、わしは、夜のあいだしか地下の世界からあがつてくることをゆるしてもらえない。だから、本を読むための、この世の光がなかつたのだ。

わしは、七年間というもの、毎日毎日『明かりをつけてくれ』とさけびつけたが、だれもこたえてくれなかつた。だが、いま、おまえたちのおかげで、義務をはたすことができた。これでわしは、天上の世界にのぼつていくことができる。もう、この世の光をもとめなくともよくなつた。

わしは、おまえたちの親切にむくいといと思う。かまどのタイルの下に黄金のつまつたかめが七つうめられている。それをおまえたちにやろう。ああ、わしは、いま、安心してこの宮殿から出ていくことができる」

そして、老人は消えました。

七人の息子たちは台所にもどり、母親にすべてを話しました。母親は、すぐに息子たちにかまどのタイルの下をほらせました。すると、黄金のつまつたかめが七つ出てきました。

こうして、女と息子たちは、このあたりにくらべる者のないほどの金持ちになり、宮殿の中にこわいものが出ることもなくなりました。

カタクリヒト カタクラハト

おとぎ話はおしまい

カタクラハト カタクリヒト

光のおとぎ話

出典  
『語りの森昔話集1 おんちよろちよろ』村上郁再話  
原話  
『世界の民話13』竹原威滋訳／ぎょうせい